

「中国における対日感情」の実態と悪化要因に関する研究

- 1988年-2008年の各種世論調査結果の複合的分析を中心に -

アジア太平洋研究科博士後期課程

小林良樹(4002S308-9)

本研究は、①1990年代から2008年までの期間の「中国における対日感情」の悪化の背景に有る様々な要因を包含する鳥瞰図的・系統的な「枠組み構造(フレームワーク)」の構築を試みること、②その上で、「近年の『中国における対日感情』の悪化の原因は何らかの1つの要因に帰せられるものではなく、異なったレベルに属する複数の様々な要因が複合的に絡み合ったものである」旨を実証的に検証すること、を目的とするものである。

◎ 本研究の課題と意義

昨今、日中関係は、経済・貿易分野を始めとしてその関係はますます深化している。その一方で、1990年代以降「中国における対日感情」は悪化傾向にあり、しかも、そうした世論が中国の対外政策過程に与える影響力は年々上昇しつつあると指摘されている。

「1990年代以降の中国における対日感情の悪化」の問題に関してはこれまでも多くの先行研究がなされている。しかし、同時期の「中国における対日感情」の実態に関して、世論調査結果等に基づきその特徴(トレンド、属性別の特徴等)を具体的・客観的に分析したものは殆ど見あたらない。また、「対日感情」の悪化要因に関しても、様々な観点から多くの先行研究がなされているものの、「それぞれの要因が本当に重要であるのか否かに関して客観的なデータに基づく検証は殆どなされていない」、「各要因の相互の関係等については必ずしも十分な整理はなされていない」などの問題点がある。

こうした現状に対し、本研究は、以下のような分析を行うものである。

- 1990年代から2008年までに中国において実施された30個以上の世論調査のデータを有機的・複合的に活用し、当該時期における「中国における対日感情」の実態をより客観的、具体的かつ実証的に分析し、把握することを試みる。
- 「対日感情の悪化」の原因と考えられる複数の要因の相互の関連性を明らかに

にし、これらの諸要素を包含する鳥瞰図的・体系的な「枠組み構造」ないし「フレームワーク」の構築を試みる。

- こうした「中国における対日感情の悪化要因の枠組み構造」に対して、前記の「1990年代以降の中国における対日感情」の実態に関するデータに基づき実証的な検証を加える。

すなわち、本研究は、「近年の中国における対日感情の悪化の要因は何か」、「様々な悪化要因を包含する『枠組み構造』は如何なるものか」という問題に対して、「理論的分析アプローチ」と「データに基づく数量的分析アプローチ」の融合の上により実証的な分析を加えることを試みるものであり、かかる点に本研究の独自の意義があるものと考えられる。

◎ 本研究の展開

本研究の構成は以下のとおりである。

序 論：本研究の課題と展開

第1章：各種世論調査結果の複合的分析 1：対日感情の「程度」と中長期的トレンド

第2章：各種世論調査結果の複合的分析 2：属性別の特徴と日本のイメージ

第3章：「中国における対日感情」の悪化要因の「枠組み構造」の構築

第4章：「枠組み構造」の妥当性の実証的検証

終 章：本研究のまとめと今後の展望

第1章及び第2章においては、1988年から2008年までの間に中国において実施された約30種類の世論調査結果のデータを複合的に活用して分析を行い、同時期の「中国における対日感情」の実態を具体的かつ客観的に把握することを試みた。その結果、

- 「中国における対日感情」は、中・長期的トレンドとして特に1990年代中盤から2000年代中盤の時期における悪化傾向が顕著であり、こうした中国における状況は他の東アジア諸国等と比較しても特異なものであること。
- 同時期の「中国における対日感情」には様々な属性別（年齢層別、地域別、学歴別等）の特徴があること。
- 「対日イメージ」の具体的内容としては、「非常にステレオタイプ的であること」、「歴史問題へのこだわり」や「日本の軍国主義化への懸念」が強いこと。

などを客観的データに基づき明らかにした。

第3章においては、先行研究の理論的蓄積等を踏まえ、中国における「対日感情の悪化」の背景にある様々な要因を包含する鳥瞰図的・系統的な「枠組み構造」の構築を試みた。具体的には、1990年代以降の「中国における対日感情の悪化」の原因は、①個人レベルでの「心情」の問題、②日中それぞれの「国内事情」の問題、③日中を取り巻く「国際情勢」の問題、という3つの異なったレベルに属する様々な要因が複合的に絡み合ったものである旨を明らかにした。

第4章においては、前記の「中国における対日感情」の実態に関する分析データ等に基づき、第3章において構築した「中国における対日感情の悪化要因の枠組み構造」の妥当性を「理論的分析アプローチ」と「データに基づく数量的な分析アプローチ」の融合の上に検証する作業を行った。

最後に終章においては、第4章までの議論に基づき、冒頭に提示した仮説（「1990年代以降の『中国における対日感情の悪化』の原因は、何らかの一つの要因に帰せられるものではなく、レベルの異なった様々な要因が複合的に絡み合ったものである」）の検証を改めて行うとともに、「対日感情の悪化」の防止に向けた提言、今後の研究課題等に関して簡単に指摘を加えた。

本研究の結論は、一見すると、既にこれまでも縷々指摘されてきた「対日感情の悪化要因」を改めて敷衍しているに過ぎないように見えるかもしれない。しかし、中国における「対日感情の悪化」の背景にある様々な要因を包含する鳥瞰図的・系統的な「枠組み構造」を構築し、そうした「枠組み構造」の妥当性を「理論的分析アプローチ」と「データに基づく数量的な分析アプローチ」の融合の上に検証する作業を行ったという点に本研究の大きな価値があるものとする。

(以上)